

大島紬を「産業」として遺すことはできるか？

鹿児島大学工学部 3年 豊嶋美結

課題意識

大島紬は鹿児島県を代表する伝統工芸品である。奄美大島で誕生し、発展してきた。絹糸の先染めを行い、織り上げることから「大島紬は二度織る」といわれる。今回このテーマに取り組んだ理由は、学習を進める中で大島紬の精密な柄と製造技術に感動し、遺していきたいと感じたからである。大島紬を産業的側面から見ることで継承の可能性を明らかにすることが本研究の目的である。

研究方法

- ・大島紬生産の現状
- ・大島紬生産における課題

これらについて、現地でのフィールドワークやインターネットによる調査を行った。

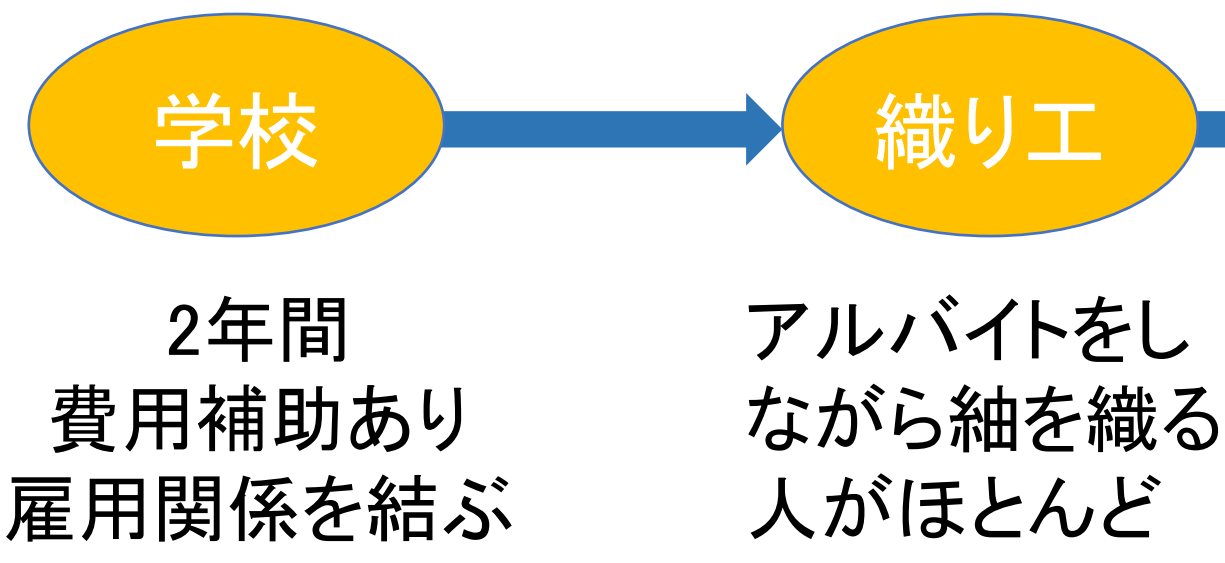
調査結果

◆ 後継者問題

➤ 作り手の育成

作り手の減少に伴う生産反数の減少

需要の高まり



「生産反数の減少」自体は希少価値が上がるというメリットもある
しかし、需要と供給のバランスが乱れつつある

生計を立てることができず、賃金の問題で辞めてしまう人が多い

➤ 後継者不足

- ・現地調査でのヒアリングによると、紬従事者の賃金は、**時給200~300円**程度とも言われているとのことだった。
 - ・文献調査では「時給300~400円とも言われている（砂山七郎 2013, p.133）」とあった。
- ⇒賃金の改善が重要課題だが、現状での改善は難しい

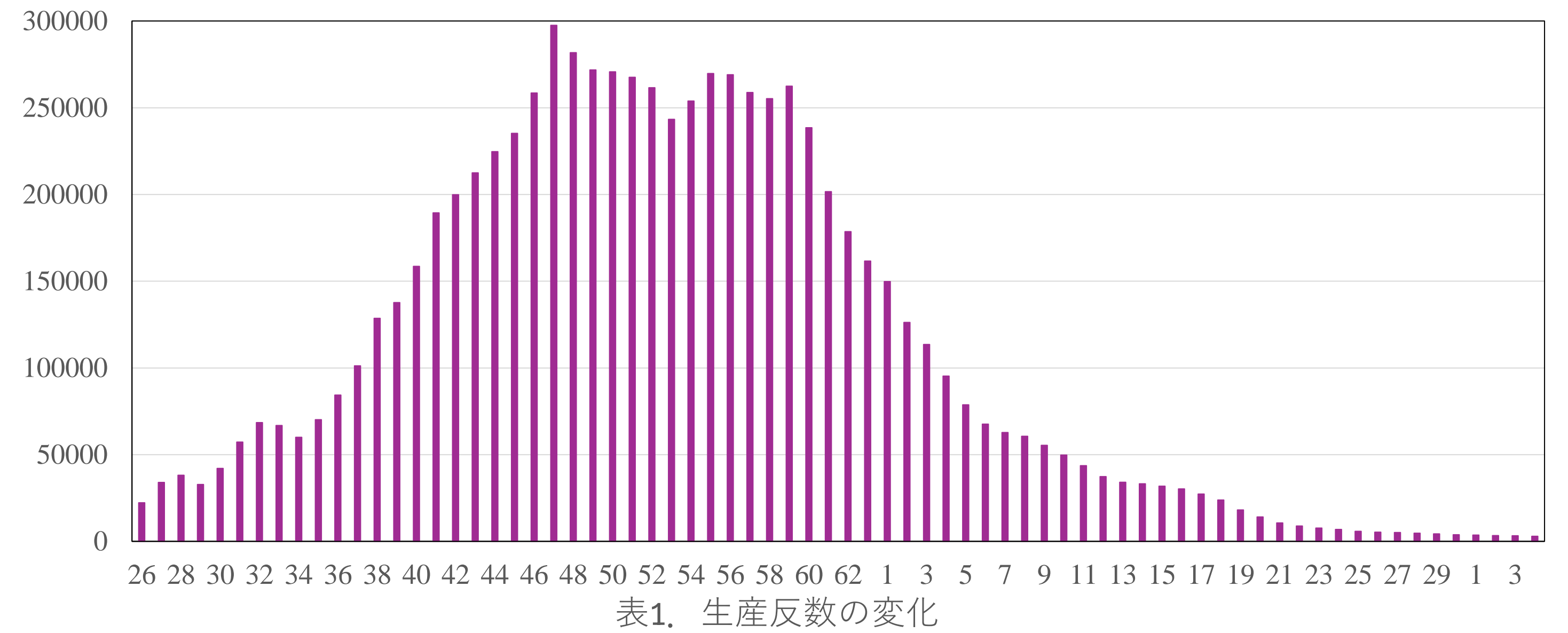
◆ 生産反数の減少

- ・本場奄美大島紬協同組合の資料によると、令和4年度の本場大島紬生産状況は**2,960反**である。
- ⇒年間生産3,000反を切っている状況は産業として成立しているといえるのか？
- ・牧・絹織物の牧さんによると、生産反数は1年に前年度より1割ずつ、またはそれ以上の割合で減少している。

生産年	反数(反)
昭和47年	297,628
令和4年	2,960



全盛期(S47)の1%まで減少



考察

・産業的構造の問題点

本場奄美大島紬協同組合

大島紬の作り手(生産者)

作り手を育てても辞めてしまう

作り手が足りていない

⇒作り手を育てる機関と生産者の問題認識にギャップがある

産業的構造の限界

紬従事者の賃金や需要と供給のバランスをみると、構想的に産業として成り立っていないと考えられる。

⇒産業として成立させるには、紬従事者が最低賃金以上で働くことを可能にする必要がある

⇒大島紬業界が健全である必要がある。末端価格の付け方や生産者と賃金流通の構造に課題はないか？

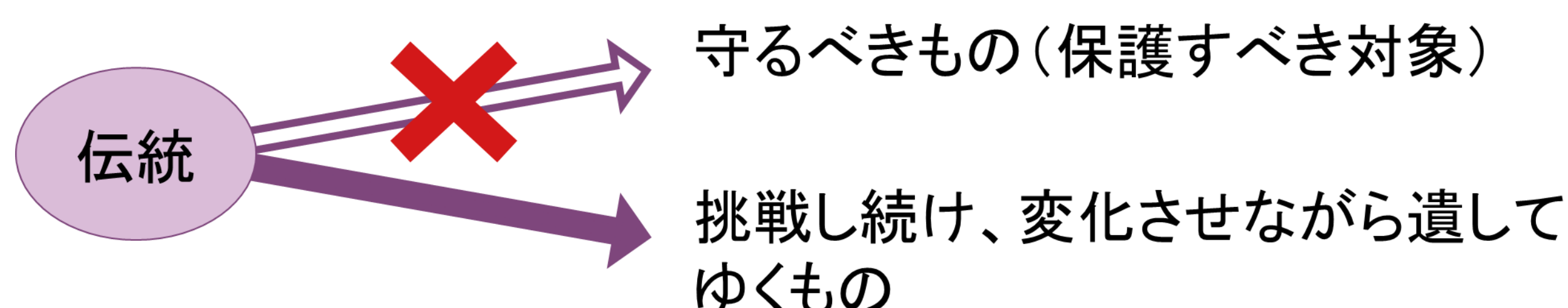
・大島紬の産業的保存の今後

年々生産反数が減少しており、現状で産業的に成り立っているとは言えない

⇒「作り手・流通・販売」の賃金分配体制を整える必要がある

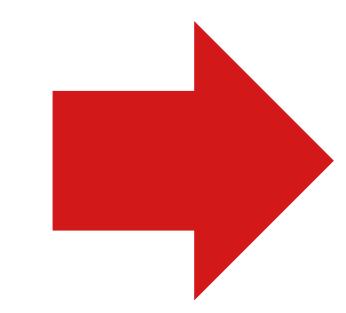
⇒大島紬の流通における末端価格が適正であるかの確認も必要である

従来の産業的とは異なる「新しい産業的保存」を考えるべきではないか？

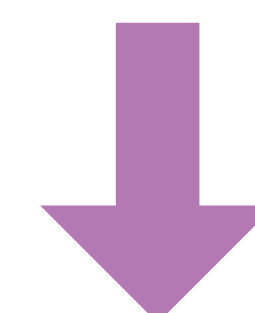


提案

リサーチクエスション:
大島紬を「産業」として遺すことはできるか？



できる!



ただし、現状のままでは難しい

産業として保存する新しい方法

- ・緻密な柄など高度な技術が必要とされる反物を生産
- ・適正価格での販売
- ・その利益を適正に分配する



- ・緻密な柄のものが遺れば、必然的に一般的な柄のものやその技術を遺すことができる。
- ・現地でのインタビュー調査により、高度な技術を必要とする大島紬の反物は需要が高まってきていることがわかった。
- ⇒柄の緻密さなど、ニーズに合わせたものを作ってゆく

- ・流通の構造に問題がないか調査する。

興紬工房の本場大島紬

タイトル: 牡丹

2020本場奄美大島紬グランプリ大会で最優秀作品賞(グランプリ)を獲得した。

【参考文献】

砂山七郎(2013)『本場奄美大島紬』再生への課題と可能性『中小商工業研究』(116)pp.129-139

【ご協力】

・夢おりの郷(大島郡龍郷町)
・興紬工房(大島郡龍郷町)

・本場奄美大島紬協同組合(奄美市名瀬)
・牧・絹織物(奄美市名瀬)
・原絹織物 仁左エ門(奄美市名瀬)